



戦時下の学校と

子供たち(2)

太平洋戦争初期～中期
(昭和17～19年頃)

日本は、「大東亜共栄圏を建設する」としてアメリカや世界の国々を相手に、戦争を拡大していきました。これが太平洋戦争です。

子供たちは、どんなことを教えられていたのでしょうか？
どんな願いを持って暮らしていたのでしょうか？

4. 太平洋戦争(大東亜戦争)開始

(昭和16年12月8日)

昭和16年(1941)12月8日、日本海軍はハワイの真珠湾にいた太平洋艦隊を襲い、太平洋戦争(当時は大東亜戦争と言われた)を始めました。



金華国民学校高等科 軍事訓練

した。そして、「この戦争は正義の戦争だ」とアピールしました。続々と軍隊を東南アジアの国々に送り込み、植民地を支配するイギリスやオランダの軍隊と戦い始めました。当初は日本軍は絶対調で、ラジオで日本軍の勝利を伝え、人々は「勝った、また勝った」と喜びました。

毎月8日は宣戦の「大詔奉戴日」となり、各学校では奉戴式・神社の清掃や参拝が行われました。

国民学校高等科では、軍隊さながら「軍事教練」を行う等、軍事的な指導が行われるようになりました。

中等学校生は出征軍人の留守家庭の手助けとして、麦刈り・稲刈り・桑摘みなどに奉仕し、食糧増産のための開墾作業などに従事しました。

国民学校各校区では、金属類の回収・灰集め・馬糞拾い・イナゴ取り

戦いでも大敗しました。アメリカ軍は、日本の守備隊がいる南太平洋の島々に次々と上陸し、日本は敗退を重ねていきました。



少年兵募集宣伝ビラ

昭和18年(1943)1月に「中等学校令」が改正され、就業年限が5年から4年に一年短縮されました。

そしてこの年、少年兵の志願年齢が引き下げられ、「満14歳・中学三年生以上」が対象になりました。海軍予科練年齢も下げられました。

実際に学校では、陸軍特別幹部候補生、海軍甲種飛行予科練習生、陸軍幼年学校、予備兵学校などへの応募が増えました。そして、軍事教官などによる勧誘も強く、特に予科練への入隊者が増えていきました。

昭和18年7月、中学校・実業学校の生徒に勤労動員が命ぜられ、男子は各務原の陸軍航空廠で飛行機の掩体壕(山を掘って、空襲から飛行機を守るための施設)造りに動員されました。幅25m・高さ15m・長さ36mの土壕を、炎天下でモッコとスコップだけで造るきつい作業でした。女子も電気工業所のコイル巻きや紡績会社などの作業に動員されました。



わら人形をたたく子供たち
長良橋にて

などがさかに行われました。

昭和17年(1942)になると、戦争の長期化に伴い、物資不足がますます深刻になっていきました。そのため大政翼賛会や新聞社等は「国民決意の標語」を募集し、その入選作「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ!」「一億火の玉だ」「全てを戦争へ」等が日本中に広がりました。

岐阜市では寺院の梵鐘等の供出やパンの切符制も始まりました。

同時に「鬼畜米英」(敵国のアメリカやイギリスなどを鬼や獣として蔑視した言葉)が流行しました。子供たちは学校でも地域でも、外国人の顔をした人形を、殴ったり蹴飛ばしたりして痛めつけました。

しかし、昭和17年(1942)6月のミッドウェー海戦を機に、連戦連勝だった日本が負け始めました。日本軍の戦いぶりは「大本営発表」

6. 「中学生も兵士に」

学校間競争も

(昭和19年～20年)

昭和19年(1944)岐阜合同新聞は、「中等校三年生から応募、新たな海軍予科生制度(7月)、「この先輩に続かん」と、少年兵総進撃(8月11日)「少年兵志願せよ秋は今、来月から受け付け始まる(8月27日)等、さかんに生徒出陣に関する記事を載せ宣伝しました。そして、「岐阜一中一四八、武儀中八五、斐太中五六、二中五三、本巢中二九」等と、学校別に応募者を発表し、学校間の競争心をあおりました。

また、上級学校への進学を勧めてきた今までの方針を転換したり、農業



予科練入営を送る

という形で、新聞やラジオで国民に伝えられましたが、軍に都合の悪い情報は記事になることや放送されることはなく、ミッドウェー海戦についても「日本海軍がまたアメリカ艦隊を打ち破った」と正反対の発表がされました。

「徹明国民学校時代の思い出①」

(昭和10年生まれのYさんの話)

その頃の学校生活は、朝は集団登校でした。金神社の所まで来ると上級生に「一列に並べ」と言われ、みんなが一列に並ぶとちゃんとお辞儀をしてから学校へ行きました。

東門を入ったすぐ右手に楡皮葺きの小さな建物・奉安殿があり、中には昭和天皇の写真が入っていました。その前に来ると一列に並んで、「最敬礼!」と言われます。すると膝に手をつけておじぎをしました。

教室は1年生が男女共学、2年生以上が男女別々で、私は女子ばかりの楽しいクラスでした。学校のガラスには、ガラスが割れた時破片が飛ばないように障子紙が貼ってありました。講堂では、高等科のお姉さんたちが長い長刀を持っていつも練習しているのを見ました。

5. 日本軍敗退と「中等学校令」改正

(昭和17年～19年頃)

昭和17年(1942)8月からのガダルカナル島の戦いに続き、昭和18年(1943)5月、アッツ島の

昭和16～17年の学校制度

(〇は義務教育)

- 国民学校初等科→1年生(6歳)～6年生(12歳)
 - 国民学校高等科→1年生(13歳)～2年生(14歳)
 - 中等学校(男)→1年生(13歳)～5年生(17歳)
 - 高等女学校(女)→1年生(13歳)～5年生(17歳)
- ・その他に、盲学校、聾哑学校、実業学校、青年学校、師範学校、女子師範学校、高等学校高等科、専門学校、帝国大学、商科大学、医科大学などがありました。
(※中等教育以上は年齢関係なしの複線でした。)

や商業に進路をとることをあきらめさせたりして、教師が先頭に立ち、学校ぐるみで執拗に予科練などに応募させたのです。

※今回の「戦時下の学校と子供たち」(2)の続きは、次号(3)でご覧下さい。

○この文章は、「岐阜県史」「岐阜市史」「写真集・目で見る岐阜市民の100年」「岐阜県教育史」「学校も戦場だった」等をもとに、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア

「お話・岐阜の歴史サークル」

代表 後藤 征夫

http://bookgeocities.jp/gifurekisi/kekisrop.htm

TEL058-231-6726